

連携モデル構築事業 「依存症の連携支援についてのアンケート」結果 (速報版)

1 アンケートの実施目的

依存症や依存症に関連する問題でお困りの本人や家族の相談先となる精神保健福祉センターや保健所、大阪市各区保健福祉センター、堺市各保健センター、市町村相談窓口、依存症専門医療機関や依存症支援機関、支援団体等の連携支援の充実を目的とし、相談対応や連携支援の実態やニーズ、課題を把握し、依存症の連携支援体制の推進に活用する。

2 アンケート協力依頼依頼先 (※下記機関所属の担当職員)

- 政令市精神保健福祉センター、府保健所、中核市保健所、大阪市各区保健福祉センター、堺市各保健センター
- 府内各市町村の障がい福祉担当課、高齢福祉担当課、生活保護担当課、生活困窮者支援担当課、保健センター、基幹相談支援センター、いきいきネット相談支援センター、地域包括支援センター等
- 大阪府・大阪市・堺市依存症専門医療機関

3 実施期間

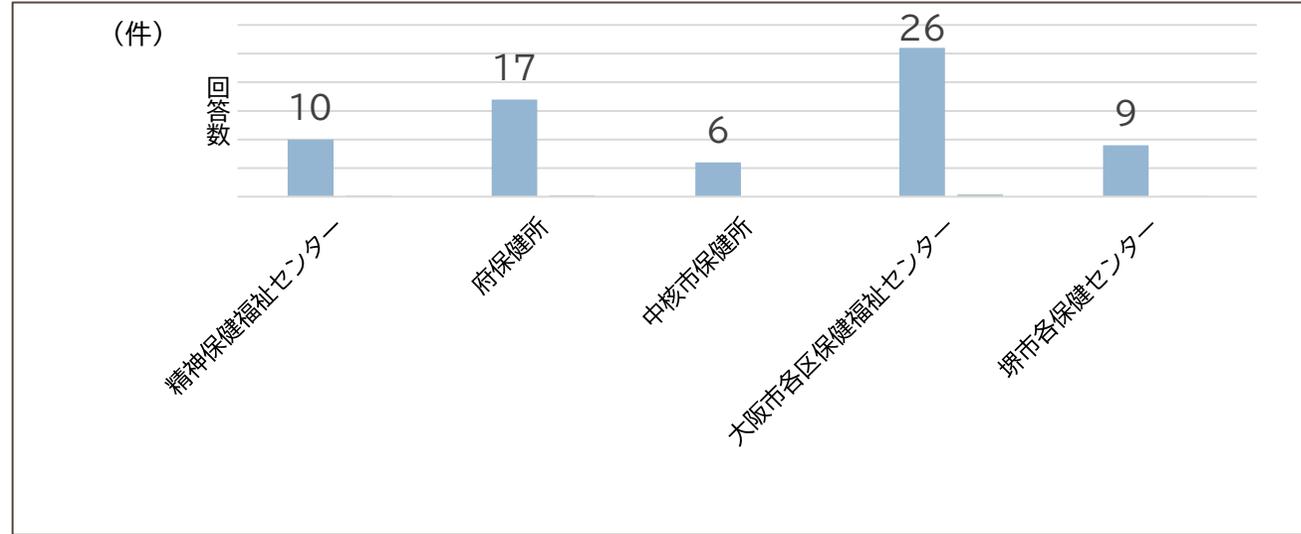
令和7年6月16日(月)から令和7年7月18日(金)17時まで

4 実施方法

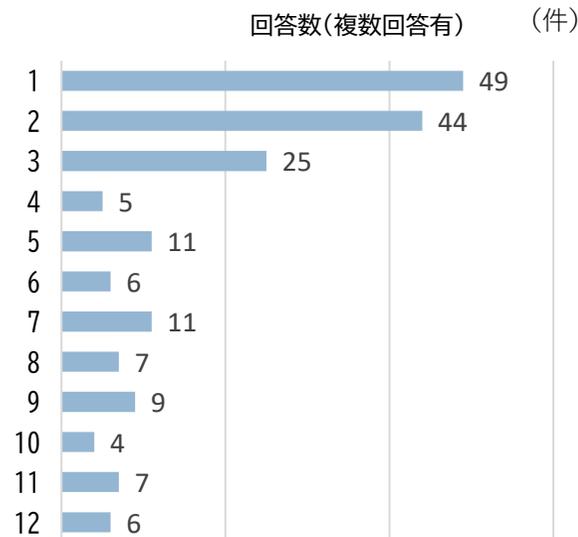
大阪府行政オンラインシステムの入力によりアンケート回答を依頼

1 専門相談機関向けアンケート結果

■回答件数:68件



【質問1】 依存症のご本人やご家族の支援において、貴機関が主に連携している機関を教えてください。



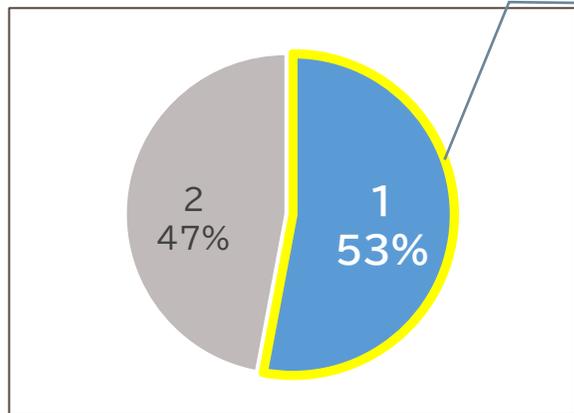
【質問2】 【質問1】で記載いただいた機関とはどのような連携をされていますか。(主なもの、一部要約)

- ・ 受診の相談や同行
 - ・ 自助グループへの同行
 - ・ 福祉サービスや支援の利用調整
 - ・ 訪問看護へのつなぎ
 - ・ 自助グループ会員と一緒に本人への受診についてはたらきかけ
 - ・ 自助グループに体験談、研修講師の依頼
 - ・ 自助グループ開催場所の提供
 - ・ 借金相談の同行
 - ・ ケース会議の開催
- 等

1 専門相談機関向けアンケート結果

【質問3】【質問1】で記載いただいた機関以外の機関も含めて、依存症のご本人やご家族に対して、連携した支援を行う際に苦慮されていることはありますか。

【質問4】どのようなことで苦慮されていますか。(主なもの、一部要約)



- 依存症を受け入れてくれる医療機関が少ない。
- 主にアルコール依存症の身体科の受診調整。
- 依存症が病気という認識を持ってもらうのが難しく、本人の意志で何とかなると思われている支援者がいる。
- 本人との関係づくりが大切だと感じているが、本人の意思よりも家族や支援者側が、「どうにかしてほしい」との思いが強い。
- 支援者の知識不足で、かかわる上での目的や目標があやふやで、同じ方向を向いて進めないと感じる。
- 家族支援の難しさ。
- 本人の動機付けの難しさ。

等

【質問5】他機関と連携した支援を行う上で、工夫をされている点やコツがあれば教えてください。(主なもの、一部要約)

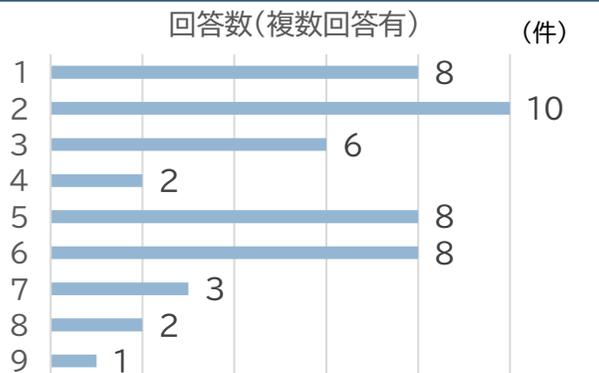
- 本人の話を聞き、どこの機関が適切かを判断したうえで連携を依頼する。
- 他機関を案内する際に、他機関の窓口へ連絡し、当日は相談者とできるだけ同行する。
- 日ごろから依存症ケースについては他機関も巻き込んだ形での支援を考え、依存症の捉え方、支援方法を一緒に体験してもらう。また成功事例は必ずフィードバックすることにより、地域相談機関の支援により依存症は回復することをイメージしてもらう。
- つないで終わりではなく、可能な範囲で伴走する。
- 訪問・面談・嘱託医相談の活用について積極的に提案している。
- 専門病院に入院された時は退院を見据えて関係機関に連絡し、早期介入を依頼、情報共有する。
- 支援者に酒害教室への参加を勧める。
- 連携する機関を見学する等し、特色などを知っておく。
- OAC地域交流会など、相談支援とは違う場面をつながりをつくる。
- 互いの支援できる範囲を理解し、補い合う。

等

2 専門医療機関向けアンケート結果

■回答件数 12件

【質問1】 依存症のご本人やご家族の支援において、貴機関が主に連携している機関を教えてください。(複数回答有)

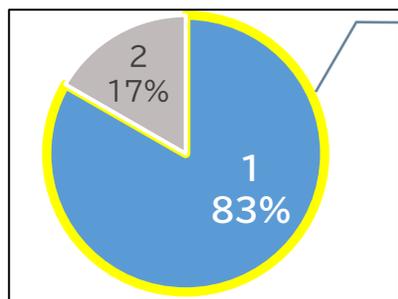


【質問2】 【質問1】で記載いただいた機関とはどのような連携をされていますか。(主なもの、一部要約)

- 身体疾患への対応
- 自助グループにメッセージを依頼
- 自助グループへの同行やオンライン例会への参加
- 訪問看護による状態把握、支援依頼
- 障がい福祉サービス事業所への見学同行
- グループホーム入居や就労支援事業所通所のつなぎ
- 多重債務者への債務整理機関紹介

等

【質問3】 依存症のご本人やご家族に対して、地域で連携した支援を行う際に苦慮されていることはありますか。



【質問4】 どのようなことで苦慮されていますか。(主なもの、一部要約)

- 社会資源や自助グループへ見学同行を行っても、その後繋がらなかつたり継続しない。
- 医療者や支援者でも依存症に関する知識や理解が少ない。
- 回復は一朝一夕にはいかないが、即断的な解決方法を求められることがある。
- 家族支援がクリニックや訪問看護ステーション、デイケアでは困難。
- 連携のためにケア会議などに参加するが対価がない。
- 身体科医療機関との連携、介護領域、障がい福祉領域など地域支援者との連携。

等

【質問5】 地域の機関と連携した支援を行う上で、工夫をされている点やコツがあれば教えてください。(主なもの、一部要約)

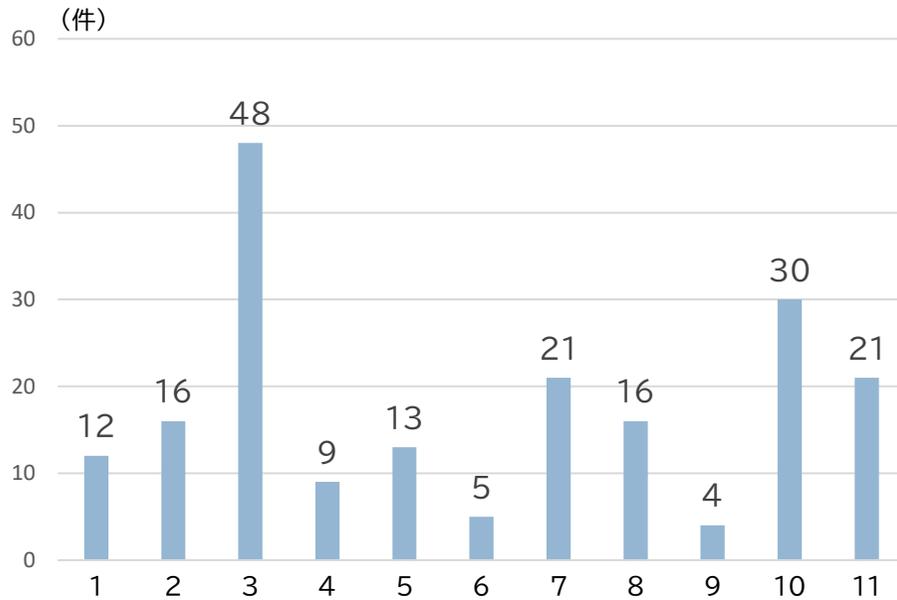
- 多職種会議の開催。 ・保健所や保健センターの嘱託医相談から医療への迅速なつなぎ。
- 依存症を得意とする機関と連携する。そうでない場合も対応方法や特性などを共有しながら進める。
- 院内プログラムで地域資源の情報提供を行う。 ・依存症の理解を深めるために院内プログラムに参加してもらう。
- 問題が発覚した時だけでなく、日頃から連絡をとり、良い変化も共有するようにしている。
- 顔の見える関係を意識して、互いの機関の機能を理解して支援するように意識している。
- 依存症は対象者が抱えている問題の一部として解釈し、その背景を理解し、対象者と共に考えていく方針を共有することを心がけている。

等

3 市町村相談窓口アンケート結果

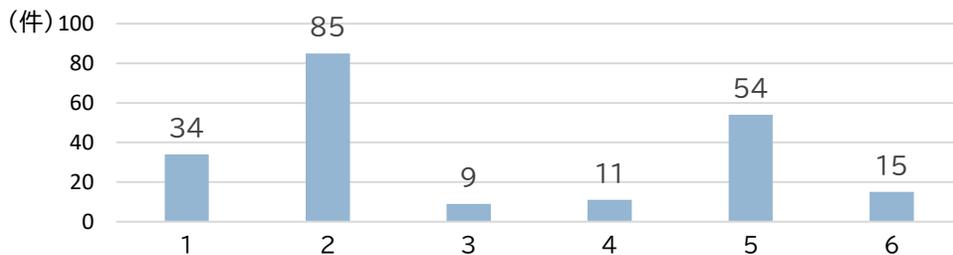
■回答件数 195件

◆所属



選択肢	回答数
市町村障がい福祉担当課	12
市町村高齢福祉担当課	16
市町村生活保護担当課	48
市町村生活困窮者支援担当課	9
市町村家庭児童相談担当課	13
市町村女性相談担当課	5
市町村保健センター	21
基幹相談支援センター	16
いきいきネット相談支援センター	4
地域包括支援センター	30
その他(人権、社会福祉協議会、子育て支援室等)	21

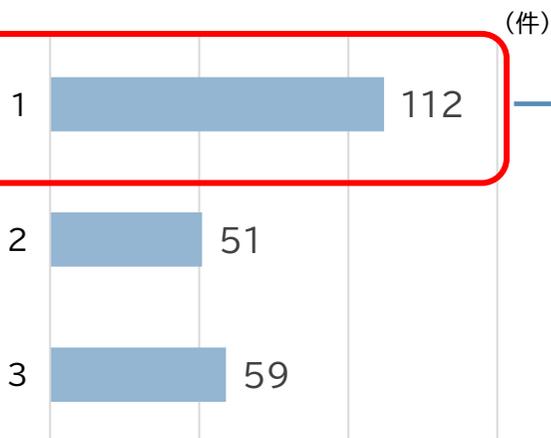
◆職種(複数回答有)



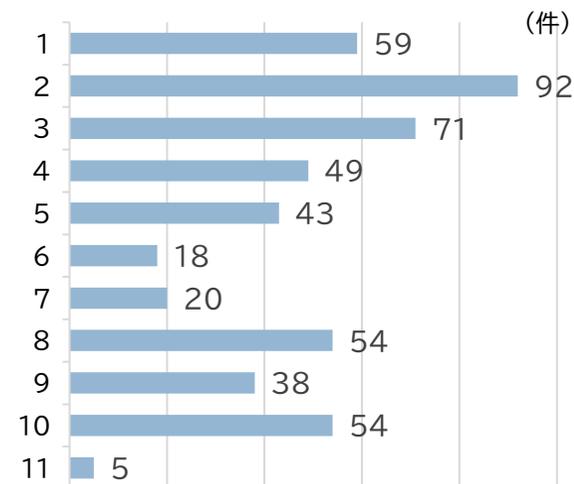
選択肢	回答数
看護師・保健師	34
ケースワーカー・相談員	85
CSW	9
ケアマネージャー	11
事務職	54
その他(心理士、保育士、査察指導員等)	15

3 市町村相談窓口アンケート結果

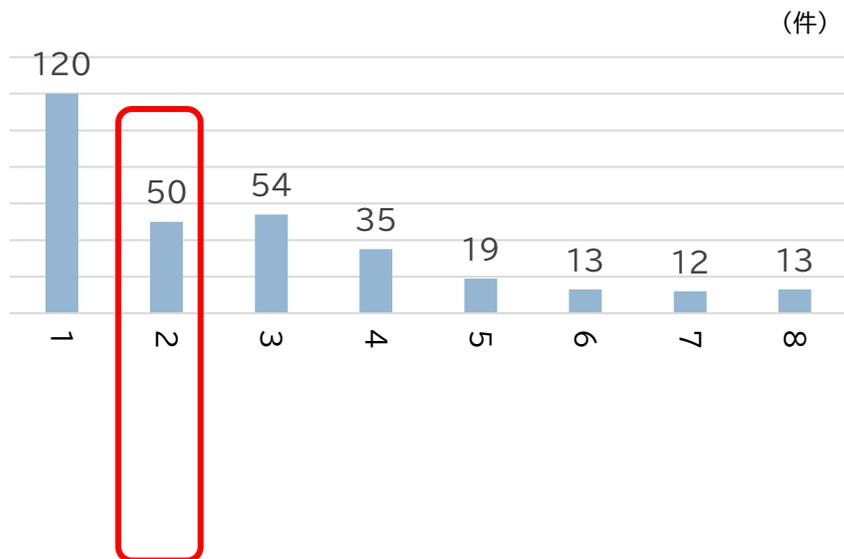
【質問1】相談業務の中で、依存症の相談もしくは依存症が背景にあるかと思われる事例はありますか。(複数回答有)



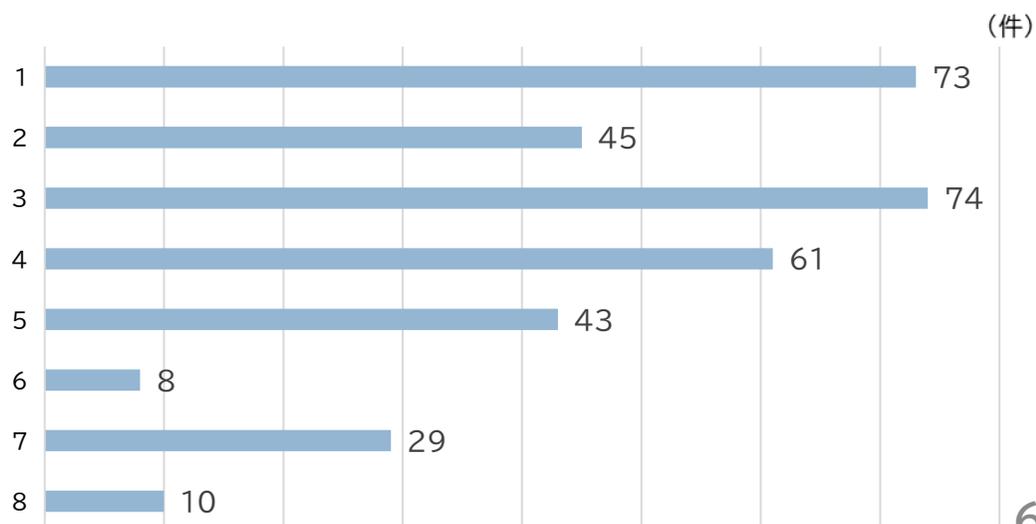
【質問2】どのような点から依存症が背景にあるかと思われるか。(複数回答有)



【質問3】どのような依存症相談でしたか。もしくはどのような依存症が背景にあるかと思われるか。(複数回答有)

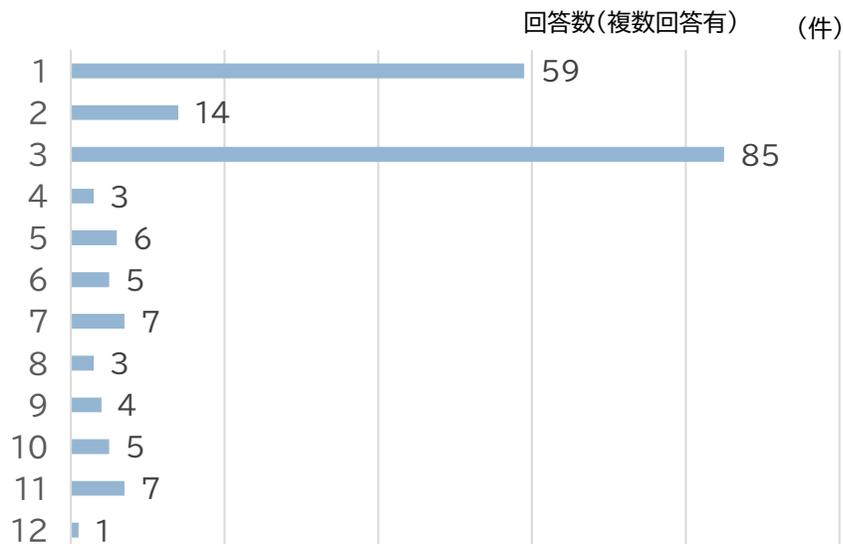


【質問4】依存症の相談があった場合、もしくは依存症が背景にあるかと思われる場合、貴機関ではどのような対応をされますか。(複数回答有)



3 市町村相談窓口アンケート結果

【質問5】 依存症の相談があった場合、もしくは依存症が背景にあるかもしれないと思われる際に、情報提供や同行支援などを行う具体的な機関名を教えてください。

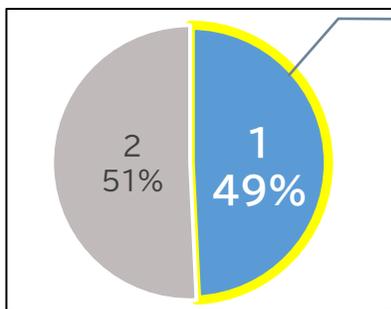


【質問6】 依存症の相談、もしくは依存症が背景にあるかもしれないと思われる相談があった場合、どのようなことが難しいと感じますか。(主なもの、一部要約)

- 本人に依存症の認識や自覚がなく、早期の対応が難しいこと。
- 依存症回復プログラムにのれず途中で挫折したり、支援が継続できないことがある。再発することも多い。
- 本人が治療したいと思ってもらえず、その背景に生きる希望がないためと思われるが、こういった方に生きる希望を持ってもらうことの困難さ。
- 家族相談が多く、本人を必要な医療機関や相談につなげることが難しい。また、家族によるイネイブリングがあり、対応方法を伝えることが必要。
- 相談にくる時点で家族関係が悪化しており、家族のサポートをうけることができず、生活面・今後の支援に影響が大きい。
- 依存症がきっかけで債務を抱えている場合、依存症と債務の相談を並行して進めていけないといけませんが、依存症の相談機関に繋がっていかないことが多い。
- 依存症に至る背景には根深い複雑な課題を抱えている場合もあり、解決するためには多大な時間を要する場合がある。
- 依存症の場合、希死念慮が高く自死するリスクがある。
- 自分の知識が少ないために、適切な機関へのつながりができない、対象者にとって逆効果な発言をしてしまわないか不安を感じる。
- 本人だけでなく家族、特に子どもの支援が難しい。子どもを支援しようにも親が機能不全状態だと接触自体がとてむずかしい。
- 依存の課題が前面に出ていない場合も多く、相談経過を経て課題がみえてくることもある。
- 本人が「やめなければいけない」と理解しつつも、それを実行できなかつたり、支援者に正直に言えないという葛藤に、どう寄り添うかが非常に難しい。等

3 市町村相談窓口アンケート結果

【質問7】 依存症相談を受ける中で、もしくは依存症が背景にあるかもしれない人への支援の中で、他機関と連携した支援を行う際に苦慮されたことはありますか。



【質問8】 どのようなことで苦慮されていますか。(主なもの、一部要約)

- 支援者が依存症を正しく理解できておらず、誤った対応をしたり、わがままと受け止められることもある。
- 一緒に訪問したり、協力してくれる機関が少ない。
- 本人に自覚や病識がない場合、専門相談支援機関や医療機関が介入してくれない。
- 健康上の問題だけでなく、生活環境や経済問題など複合的な課題を抱えていることが多く、問題解決に時間がかかる。
- 医療、福祉、行政、自助グループ等、多くの支援者がかかわるが、それぞれの立場や方針が異なり足並みがそろわない。
- 関係機関と支援の方向性が揃わないことがある。 等

【質問9】 他の機関と連携した支援を行う上で、工夫をされている点やコツがあれば教えてください。(主なもの、一部要約)

- 定期的なケース会議を行う、情報共有の円滑化。
- 本人にとってキーポイントとなる人を見極め、支援の方向性を他機関と統一できるように、適宜情報共有をしている。
- 本人や家族に一貫した説明ができるよう、保健所からの助言を他職種にも共有する。
- 他機関に丸投げしないで、同行訪問するなど伴走して支援する。
- 支援者にも依存症を理解してもらえるようなかわりをする。
- それぞれの機関のできることを把握して連携している。
- ケース対応における役割分担を連携時に明確にしている。
- 本人への接し方、支援目標を事前に支援者間で話し合い、共通認識をもった上で支援を行っている。
- 精神保健の窓口案内時には、事前にアセスメントした内容の概略を電話で担当者に伝え、案内や同行をするようにしている。
- 精神科の医療機関と直接連携しながら対応し、身体科医と精神科医の連携ができるよう、ケースの情報共有をしている。 等